

# 空 中 天 地

50周年記念写真集

THE 50TH ANNIVERSARY ALBUM

箱根カントリー倶楽部  
HAKONE COUNTRY CLUB



芦ノ湖上空から北西方向を望む。湖のたもとに広がるのは箱根湖畔ゴルフコースで、箱根カントリー倶楽部はその北側に展開している。箱根の外輪山に囲まれた様は、まさに「壺中の天地」と呼ぶにふさわしい。さらに悠然と鎮座する富士山はさすがに日本一の名峰である



コースの北側上空から望む。芦ノ湖からの唯一の河川である早川は、コース内を流れ箱根の渓谷をうるおし、小田原で太平洋に注ぐ。富士箱根伊豆国立公園のただなかに位置する箱根カントリー倶楽部も、その雄大な景観の一部をなしている。



神山方向から朝日が昇り、ゆっくりとコースを照らしはじめる。箱根カントリー倶楽部の1日がまたスタートする



## CONTENTS

---

- 6 ● PROLOGUE
- 20 ● COURSE LAYOUT
- 21 ● COURSE
- 22 ● OUT COURSE
- 50 ● IN COURSE
- 79 ● CLUB
- 80 ● CLUB HOUSE
- 86 ● 赤星四郎と箱根カントリー倶楽部
- 90 ● THE EARLY DAYS OF HAKONE COUNTRY CLUB
- 94 ● 箱根の歴史と自然
- 96 ● POSTSCRIPT

## PROLOGUE



どこでも桜が咲けば春を実感するが、箱根においてもそれは変わらない。自然の恵みのなかで咲き散りゆく桜は、なおさらに寛ぎも格別だ。コース内は自生種のフジザクラやヤマザクラなど種類も多い。2番グリーン



フェアウェイ脇のススキの穂が銀色に輝きだせば、そろそろ秋の気配が濃厚になってくる。ラフとしては深くてハードだが、銀穂がたなびく風情は何物にも代えがたい。箱根連山を背景に一幅の絵画のような美しさを演出する。1番ホール



クラブハウスから雄大に広がるコースを望む。左手に延びていくのが1番ホールで、そのフェアウェイ右サイドにイタリ池が広がる。正面のグリーンは18番。そして、コース前方に威容を見せる箱根外輪山。山稜右の低くなっているあたりが長尾峠になる





夏の朝、日が昇るやグリーン面は鏡のように、まばゆいばかりに反射する。外輪山の麓に位置する15番グリーンは、グリーンとしてはコース内で最も高所にあり、陽光が最初に当たって緑に映えはじめる。その遠方に聳えるのは、金太郎伝説で知られる金時山



バンカー越しに13番グリーンを望む。その奥か後方に容貌船偉といっても過言ではない神山が聳え立つ。3000年前の大噴火、水蒸気爆発で秀麗だった山頂部はみごとに吹き飛ばされた。その左方（東側）の大涌谷はいまも噴煙を上げている



山が色づき、ススキの銀穂がたなびく秋。山稜から日が昇って、木々が長い影を落としていく。各ホールの脇やインターバルに、最近はススキや雑木林がめぐらしくなるようになつた。これが箱根本來の自然であり、コースも昔の姿に戻りつつある。16番グリーン



2番グリーンを取り囲む小池のたもとにポツンと立つマユミの木。さえぎるものなく風にさらされて、奇妙にくねった枝ぶりが、不思議な造形美を感じさせてくれる。その姿を池に写して、みずからも魅入っているように見える。青空が澄み渡る秋の日



雨に煙る16番ホール。高所に位置するために、ときとして雲がコースにまで降りてくる。プレイヤーにとっては霧と同様に、周囲が白く霞んで厄介なことこのうえない。しかし、プレイの手を止めて眺めやれば、一幅の山水画にも似た風情さえ感じられる



箱根の初雪は例年12月中旬で、3月までは降雪が絶えない。それほど積もりはしないが、ときには大雪となって一面の銀世界を演出する。ゴルフゲームには大敵だが、ときとして雪に閉ざされてひっそりと静まりかえるコースを眺めるのもいいものである。9番グリーン



18番ホールのオオシマザクラ。四季折々に自然を満喫できるコースだが、日本人らしさを感じさせるものといえば、やはり桜なのではないだろうか。どっしり構えたその姿は美しい。



フシアザミ



キケマン



ツリフネソウ



ムラサキケマン



アシ



クサボケ



ツルボ



ヤブカンゾウ



コジュケイ



イナカギク



センニンソウ



シシウド



タマアジサイ



ジョウビタキ



オニユリ



チカラシバ



ヘクソカズラ



カワセミ



モズ



カワラナデシコ



チダケザシ



ミゾソバ



キツネ



リス

## 生き物たちの息づかい

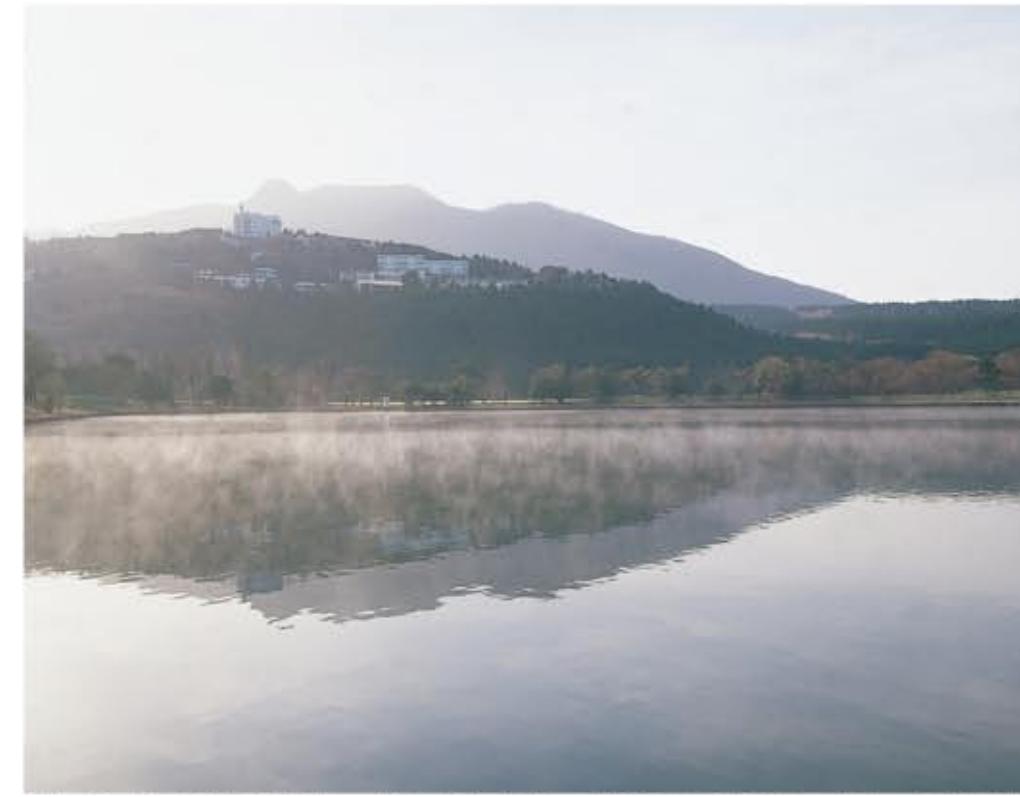
プレイの合間にコース脇のラフや林に目を止めてみると。野の草が可憐な花を咲かせ、小鳥たちがさえずりながら枝から枝へと飛び移る。ときにはリスやウサギ、タヌキやキツネさえ姿を現し、興味深げに人間たちの営みをのぞいている。コースのそこそこに自然の息吹を感じてしまう。



長尾峠からコース全景を望む。芦ノ湖が穏やかな湖面を見せ、その隣に神山が鎮座する。大涌谷の噴煙がいつに増して猛々しい



練習場からイタリ池、そして神山を望む。もともとは湿原地帯で、イタリは「板里」という地名に由来している。戦前の一時期は遊園地化の計画があり、ポート遊びや釣り人で賑わった。ただし、当時は天然のままに、迷路のような池だったという



晩秋の朝には、よく池から靄が立つ。外気の冷却に比較して水温がそれほど下がらないために、水蒸気が立ち上るのである



夏の夕刻、山稜へと日が沈もうとし、水面に最後の光を投げかけている



早春の朝、羽を休める水鳥たちが遠くに見える

## OUT

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
Back	410	145	470	440	550	210	360	516	410	3511
Reg.	375	130	425	380	500	170	330	483	385	3178
Par	4	3	4	4	5	3	4	5	4	36
Hdcp	9	15	3	1	7	13	17	5	11	

## IN

	10	11	12	13	14	15	16	17	18	計	総計
Back	215	435	486	415	195	546	370	470	427	3559	7070
Reg.	180	370	471	375	165	490	345	445	400	3241	6419
Par	3	4	5	4	3	5	4	4	4	36	72
Hdcp	16	4	10	8	14	2	18	6	12		

## COURSE LAYOUT





COURSE

OUT COURSE

No. 1



1番ホールは、これまでのストレートなミドルから、左ドッグレッグに改造された。ティや売店を移設して、赤星四郎設計当時の姿に戻したのである。よく晩秋から早春にかけてイタリ池から白い靄が立つ



新緑の美しいフェアウェイに向けてティショットを打つ



1番ティ脇の売店。ススキの群落に秋を感じる



早春、1番のスタートを待つプレイヤー。今日一日、期待に胸ふくらむ瞬間である



フェアウェイ右サイドに美しく咲くコブシ



フェアウェイからグリーンを望む。朝日を浴びて微妙なグリーンのアンジュレーションが浮かび上がる



砲台のうえに左側が凹んだ複雑なアンジュレーションのグリーンで、上って下るパッティングラインになることが多い。初秋のすがすがしいゴルフ日和である。

## No.2



2番ショートは、バックティ145ヤード、レギュラーティ130ヤード、グリーンの周囲が無数の池で囲まれたホール。赤星四郎は全面が池の島グリーンを構想していたが、地形の都合から堰を設けて流れを止め、池を段々に配することで当初の設計構想に近づけようした



盛夏、抜けるような青空と白い雲が上天をおおう。このすがすがしさこそ、高原ゴルフの醍醐味といえる



霧に煙る早朝から、キーパーたちはコースメンテナンスに汗して働く



グリーン左手前の池のたもとにたたずむヤマグワの木。芝が枯れはじめた秋の頃



山肌がまだ冬景色なのに、コブシが咲いて春の到来を告げている



パー3の145ヤード。ティショットでは池の存在がプレッシャーになる

## No.3



3番ホールは470ヤード、パー4で、やや左 ドックレッグ。雲ひとつない夏空が広がる



落ち葉がめだつ秋の倶楽部競技。ティショットは豪快に打ち下ろしていきたい



セカンド地点。上空に刷毛で描いたように薄く綺雲がたなびく好天の秋



ホールアウトしてホールを振り返ると、神山の偉容がいやでも目に入る。その神山の左下に見える大涌谷の噴煙も迫力満点。その手前の丘に建つのがパレスホテル箱根



フェアウェイを往くプレイヤー。まだ初秋の頃だが、山頂付近は色づきはじめている



ホール左サイドからグリーンを見る。3番グリーンはかなりの縦長で、中央部を尾根が走って強い傾斜をつくっている

## No.4



夕暮れどきの4番ティ。芝はまだ緑鮮やかだが、スキーの銀穂に秋を感じる



グリーンからホールを見返す。440ヤード、パー4で、フェアウェイを早川が横切り、セカンドショットが川越えになる。夏の朝、大涌谷  
のあたりが白く煙っている



青空と白雲と地上の緑は、理想的な夏ゴルフの三原色



4番ティグラウンドの脇にある売店



コブシ



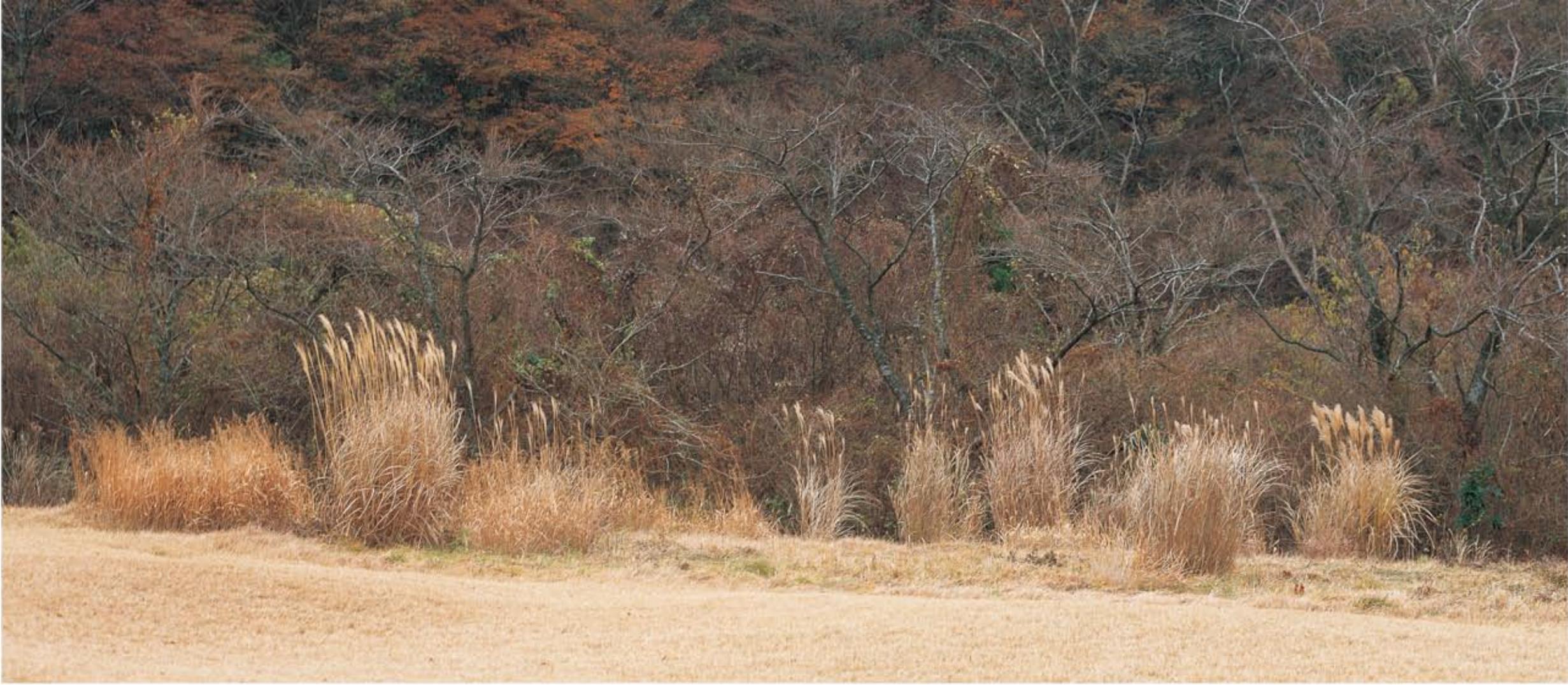
売店にある暖炉では、冬には薪をくべて暖をとる



シロヤシオ



早川は、芦ノ湖から流れ出る唯一の河川。通常は堰き止められていて、流量の少ないのでかな小川ではあるが、それでも渕などには鯉のような大きな魚を見かけることがある



芝やススキは白くなり、雑木林の木の葉はやや赤みがかる、冬景色のフェアウェイ左サイド



放流時の早川。放流は年に数度行われ、川の中ほど濃紺部分は人の背丈ほどの深さになる

### 早川の流れ

早川は、芦ノ湖から流出する唯一の河川。その水利権をめぐって争いが起きたこともある。そして、この流れが管理されるようになって、仙石原はかつての湿原から徐々に草原化している。コース内を流れる早川はふだんはおだやかで小さな流れだが、放流の際には大河のようにもなる。



白く枯れたラフに咲く可憐なスミレの花

## No.5



5番ホール全景。550ヤード、パー5。ティショットは早川越えになるが、フェアウェイが広くて思い切ってショットしていい。神山には黒い雨雲がかかっている



## 神々しき神山

コースの南東方向に姿を現す神山。容貌魁偉というか、大涌谷から立ち上る噴煙と合わせて、火山としての荒々しさをいまも失ってはいない。しかし、大噴火の前は、この山も富士山に似た流麗な姿だったという。どうにもプレイが思うにまかせないときは、この山塊をゆっくりと眺めるといい。「ちまちましたスコアなどどうでもいい」という気にさせてくれる、かもしれない…。



すがすがしい夏の高原グリーンで、快適なゴルフを楽しむ



フェアウェイ右サイドから、バンカー越しにグリーンを望む。神山にかぶせたような雲がかかる



盛夏、早川にかかる橋を渡る



フェアウェイから早川越しにティ方向を見返す。外輪山に夕日が沈む

No.6



池越えにグリーンを望む。この池も湧き水でできている。盛夏の頃、青空に向かってモクモクと積雲が湧き上がっている。  
正面の山頂が標高1213mの金時山



6番グリーンはお碗を伏せたような形状になっている。だから、ボールの落下地点次第で、バットラインの難易度も大きく変わる



6番は池越えの210ヤード、パー3



早朝のグリーン付近。秋ともなればイタリ池から露が立つ

## 春を告げる花木

初春の頃、まずアセビやコブシの木々が花をつける。ゴルフシーズンの到来を知らせる季節の便りといえる。そして、桜が芽吹けば春がやって来る。



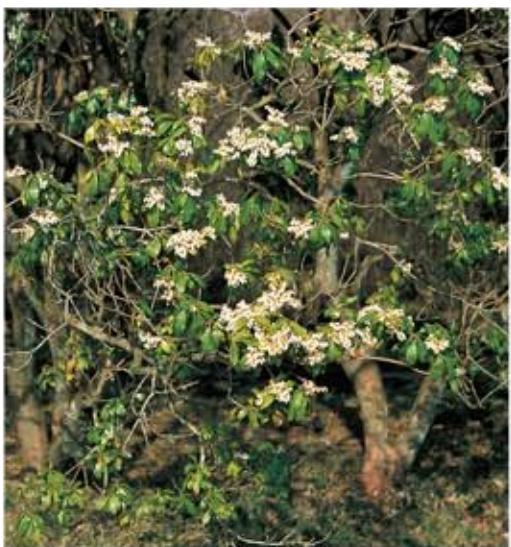
フェアウェイ脇の林に咲くスミレ。木立にはサルノコシカケが生えていた



春真っ盛り、ティ横にピンクの花を咲かせたミツバツツジ



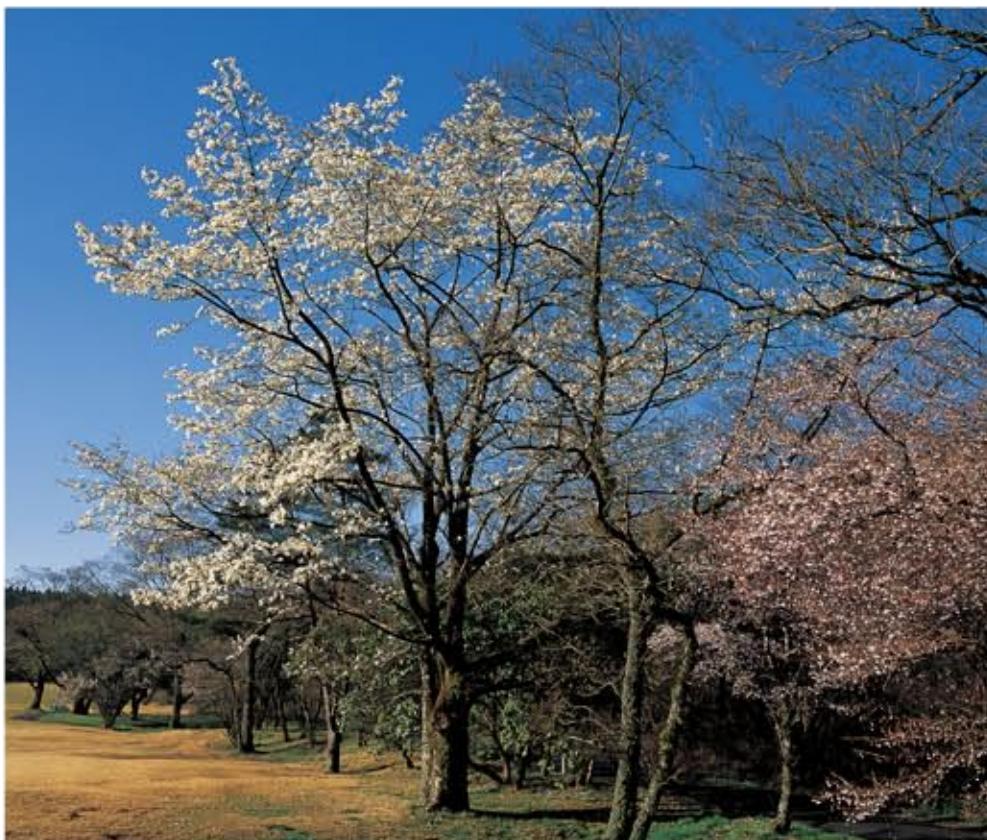
春の花木といえば、まずアセビとコブシが花を咲かせるが、やはり桜が開花してこそ春を実感する



初春、アセビが白く小さな花々を咲かせる。葉に毒があって馬や牛が食べると中毒をおこすので、「馬酔木」の字をあてるといわれる



フジザクラ



コブシ(左)とフジザクラ。伊豆諸島から伊豆半島を北上して、やがて箱根にも到達した自生の桜だ



春の到来を知らせるコブシの花

No.7



7番ホール全景。バックティ360ヤード、レギュラーティ330ヤードの短いパー4。真夏の空



4つのバンカーに周囲を囲まれたグリーン。抜けるような青空と、雲よりも白さが際立つバンカーが、夏らしさを感じさせる



気候快適な初秋の頃。グリーン付近からは大涌谷の噴煙がよく見える



ティグラウンド脇で咲き誇るフジザクラ



7番グリーン右サイドの池にたたずむシナノキの奇木。木の根元に目を向けると、鹿が池の水を飲むような姿に見える。  
その木の脇には故永野理事長命名の「駒鹿水呑・樹」の表示板が立っている

No.8



ティから8番ホール全景を望む。516ヤード、パー5。すべてが深緑に染まる、夏の日の出の頃



レギュラーティからのティショット。早川越えのロングホールで、第2打も小川を越すレイアウトになっている。盛夏らしく、真っ白いウェアがまぶしい



春、早川越しのティショット



フェアウェイ内を横切る流れは、イタリ池から早川へと注ぐ小川。もともとこれが本来の早川の流れだったが、たびたびの増水でコースにも影響が出たため、いまの早川の流れに付け替えられた



夏の終わりともなれば、早朝にはイタリ池からの白い靄がホールをおおうことが多い。10時近くまでこういう状態が続き、その後はすっきりと晴れ渡る



深紅に色づくツツジ



フェアウェイからグリーンを望む



秋の朝、白い靄に閉ざされたようなグリーン



盛夏、サードショット地点にいるプレイヤーたち

## No.9



セカンド地点からグリーンを狙う。高原の夏らしく、神山がすっきり見える



フェアウェイ横の桜の木。咲いた姿もだが、散って地面に落ちた花びらも美しい



ミツバツツジ



ティ脇のドウダンツツジの木



白い可憐な花を咲かせたドウダンツツジ



ティからホール全景を望む。410ヤード、バー4。秋の朝、木の影が長くなり、芝も茶色のトーンが濃くなってくる



コースまで雲が降りてきたなかでのティショット。ススキの穂がなびく秋の頃



夏の日のグリーン。刷毛で描いたような薄雲と抜けるような青空、そして緑はあくまでも深い

IN COURSE

No. 10



初夏の早朝、遠くに金時山が霞み名画のようなたたずまいを感じさせる



新しくなった10番ホールのコース売店に朝日がさす



多くの仲間に見守られてティショットを打つ、緊張の瞬間



新設になったパックティは以前より15ヤードのびた



グリーン脇、桜の花も散りはじめた



初秋の朝、少し霧がかったところに陽がさし、まるで天から光の柱が降りてきているかのような光景を見せてくれる



## No. 11



バックティからティショット。11番ホールは435ヤード、パー4。夏の日、木の枝にさえぎられた陽光でさえまい。



秋の朝靄に包まれたグリーン。砲台になっているが、広いことも特徴



ティグラウンドで前の組のショットが終わるのを待つメンバーたち。コブシの花が満開の早春の頃



早春の朝、朝露が張り付くグリーンを整備するキーバー



大ぶりの白い花を咲かせるコブシ。標示杭はティの場所を示している



夏、朝日に照らされて輝くグリーン

No. 12



12番は早川越しの打ち下ろしではじまる、480ヤード、パー5。日差しもやわらかくなってきた秋の午後



前の組の進行を待ちつつ、ティグラウンドで談笑するメンバーたち



満開のフジザクラ。仙石原一帯では自生のサクラとしては一番多く見かける

## 雑木林の恵み

雑木林とは、ただ雑然とした林という意味ではない。さまざまな種類の落葉樹が共生し、下草が雨水を蓄えて生物を育んでいる。無数の虫が住処を得、それを追って小鳥が、さらには動物たちがやって来る。「里山」の価値が見直されている由縁である。最近、コースでも針葉樹を伐採して広葉樹を植えたり、下草やラフの自然な姿を再生しようという試みがなされている。



ひょっこりティにまで姿を現した雄のキジ



五月雨に咲くミツバツツジ



春に黄色い花を咲かせる旧クラブハウスの名残りのレンギョウ



サードショット地点からバンカーチームにガードされたグリーンを望む。あくまでも青空が広がる夏

## No. 13



夏の陽光に照らされたティグラウンド。二本杉の上を越すショットができると、フェアウェイの好位置をキープできる。415ヤード、バー4



## 二本杉を狙え

13番ホールのランドマークであり、フェアウェイ手前にすくと聳え、ティショット方向の目印として知られている。箱根古来の杉らしく、国の史跡に指定されている箱根旧街道の杉並の系譜かもしれない。



右サイドからフェアウェイを望む



グリーンからホールを見返す。夏も終わり頃、上空には積雲や絹雲、絹積雲などさまざまな雲が交差している



グリーン横、アセビが可憐な花を咲かせている



左手前からグリーンを見る。周囲を4つのバンカーに囲まれて、アプローチを難しいものにしている





夏の空、さまざまな種類の雲が広がって、青と白のみごとなコラボレーションを奏でている

No. 14



新緑の美しさに包まれたホール全景。バックティ195ヤード、レギュラーティ165ヤード、パー3



ティショット。芝はまだ冬枯れのままだが、山中の桜が花をつけている



春に咲くアカヤシオ。芝はまだ黄色味を帯びている



春霞に包まれたホール、そして神山。別荘地の桜はすでに満開だ



ティ横に建つ売店



晩秋の頃、売店の横には冬に備えて薪が山積みになっている



大きなガードバンカーに守られ、さらに3段になったグリーンは、コース内で最も難易度の高いショートホールといわれている

## No. 15



15番ホールは、バックティからは546ヤードになるパー5

### 高原の夏

8月初旬、箱根がもっとも夏らしさを迎える季節。抜けるように青空が広がり、白い雲とのコントラストは鮮やかなばかり。ティショットはその空に吸い込まれるように飛んでいく。



レギュラーティからホール全景を望む。外輪山の麓にレイアウトされ、フェアウェイのうねりもきつい



15番グリーンはグリーンとしてはコース内の最高所に位置し、コース全体が見渡せる。周囲を外輪山に囲まれた、「壺中」という形容もイメージしやすい



山の木々も芝もほんのり色づいてきた初秋の頃



レギュラーティ付近。山もいよいよ紅葉をはじめ、秋本番も近い



冬の朝、さすがにベント芝らしくエバーグリーンを保っている

No. 16



霞がかかる夏の早朝、ティからホール全景を望む。16番ティグラウンドは標高710メートルで箱根カントリー  
倶楽部では一番高い。やや左ドッグレッグで、打左下ろしていく



グリーン奥に咲くフジザクラ。富士川から房総半島の山地に自生する桜で、箱根を代表する花木でもある。枝ぶりが細く、恥じらうように下向きに花をつけることから、乙女桜の異名もある



フェアウェイ横はススキの群落。いま、ホール脇に落葉樹やススキ、野の草を増やし、開設当時の箱根カントリー倶楽部の姿に戻そうという努力が続けられている



秋の早朝、イタリ池から発生する白い霧に包まれたグリーン付近。正面の山稜、センター やや左の窪んだあたりが長尾峠。かつては御殿場と倶楽部とを結ぶ交通の要衝だった



夏の空に向けて豪快にティショットを放つ。16番ホールは370ヤード、パー4



グリーンからホールを振り返る。打ち下ろしのホールレイアウトがよくわかる。秋からそろそろ冬に向かう頃

No. 17



夏の朝、ティグランドからホールを望む。赤星四郎の設計理念に戻すためバンカー左をフェアウェイとして本来のコース攻略の道筋が開けた



ティショットを打つ。470ヤード、パー4。かるい左ドッグレッグのミドルホール



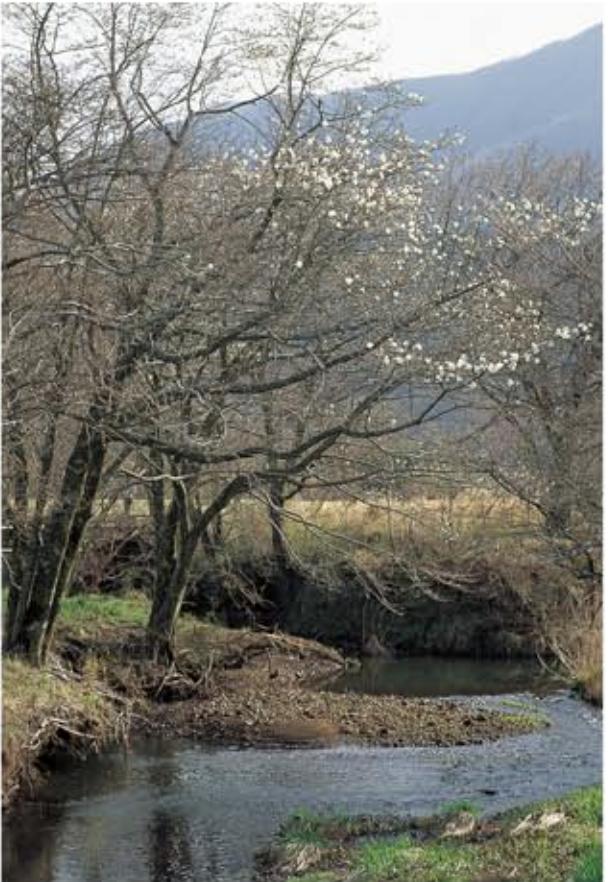
秋の朝、霧に包まれたティグラウンド付近



ティ奥はススキが群落を形成し、銀穂をなびかせる



ティ横からホールを見る。秋の日、影が長くなる



グリーンのあたりを巻き込むように早川が流れている。コブシが白い花をつけた早春の頃



グリーンには複雑なアンジュレーションがあり、ピンの位置によって難易度は異なる



盛夏、朝日に照られたグリーン。こうして光が当たると、グリーンの傾斜やアンジュレーションがよくわかる

No. 18



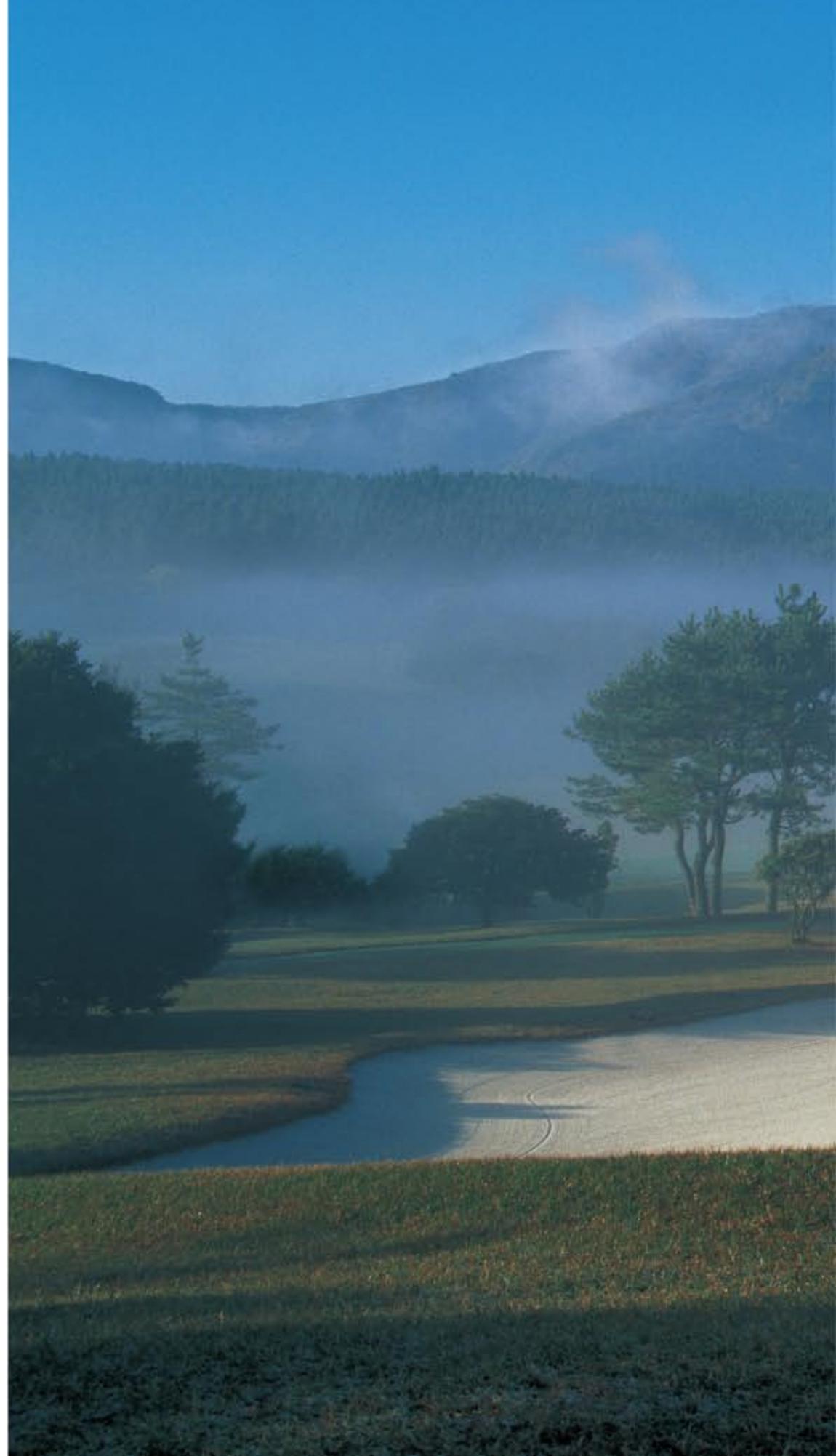
ティからホール全景を望む。427ヤード、パー4。朝方らしく影が長い。神山の全容が見晴らせる



神山に向かってティショットを打つ



ラストパット。達成感と名残惜しさが交錯する瞬間でもある



フェアウェイ左サイドに咲くオオシマザクラ



11月、朝靄に包まれたグリーン。その靄の切れるあたりから外輪山が顔をのぞかせる

## 秋の夕景

箱根外輪山が屏風のように立ちはだかっているせいか、秋の夕暮れは思った以上に早い。瞬く間に影は伸び、周囲の光景を赤っぽく染めていく。ゴルフも早めに切り上げて、グラス片手にゴルフ談義に花を咲かせることにしよう。



夕暮れのグリーン。上空をうろこ状の鱗雲が流れている



*CLUB*



CLUB  
HOUSE





食堂



展示クラブ



ロビー



浴室



ロビー



18番グリーンからクラブハウスを望む



イン側練習グリーン



アウト側練習グリーン



練習場



浴室



アプローチ練習場



アプローチ練習場のグリーン横に咲くアカヤシオ



アプローチ練習場



ロッジ



管理棟



朝のスタート前

## 赤星四郎と 箱根カントリー倶楽部

### ハイスクールからアメリカ遊学

箱根カントリー倶楽部の設計を手がけた赤星四郎は、3歳下の六郎とともに日本のゴルフ草創期に活躍したアマチュアゴルファーである。さらに、競技の一線を退いた後はコース設計の名匠として、ゴルフ界にその名を知らぬ人のない巨人であった。

その赤星四郎は1895(明治28)年、東京の神楽坂で六男六女の四男として生まれた。父親は薩摩藩の出身で、明治維新という疾風怒濤の時代状況に乗って財をなした。そして、巨万の富を古美術の蒐集と子どもたちの教育に惜しみなく使った。四郎の兄弟たちは、彼を含めて4人がアメリカで高等教育を受けることになる。しかし、東京で生まれ、アメリカ留学を果たした四郎だが、終生を通じて鹿児島弁が直らなかったという。

四郎は、麻布小・中学校を卒業した後、英語学校で英会話と英語力を身につけ、1914(大正3)年に渡米する。ローレンスビルハイスクールに入り、やがてペンシルベニア州立大学に進んだ。そして、ここでゴルフを覚えるのである。第1次世界大戦を前後して、ゴルフの主流がイギリスからアメリカに移りかけていた時代である。ウォルター・ヘーゲンが大活躍し、まだ高校生だったボビー・ジョーンズが全米オープンで8位に入って頭角を顯した。だが、当時の四郎は、何よりもアメリカンフットボールに熱中し、レギュラー選手として活躍した。さらにアイススケートやアイスホッケーにも興じていた。あるいは、実家からの豊富な仕送りを使って、高級車フォードを即金で買って乗り回したり、飛行機の操縦にも挑戦した。

### 帰国後、ゴルフに親しむ

1921(大正10)年に帰国した四郎は、すぐに東京ゴルフ倶楽部に入会、この年の10月に駒沢で開催された日本アマチュア選手権にも出場した。だが、彼のゴルフ人生は徴兵で一端は頓挫する。幹部候補生(少尉)として近衛騎兵隊に配属され、1年間の兵役を終えて除隊。その後、スタンダード石油に入社し、サラリーマン生活に入った。とはいっても、父親の遺産を譲り受け、サラリーマンらしからぬ贅沢な生活を続け、まだ日本人ゴルファーが希少な時代にゴルフ三昧に明け暮れる。しかも、会社勤めは4年間で辞め、その後はゴルフ一筋に生きていく。

日本で最初のチャンピオンコースといわれる程ヶ谷カントリー倶楽部には、赤星兄弟は揃って会員となっていた。1926(昭和1)年の第4回日本アマチュア選手権では、四郎と六郎がトップタイ

で終わり、後日のプレーオフの結果、四郎が優勝した。翌年の第1回日本オープンは六郎が優勝して、プロの浅見緑蔵と宮本留吉が2位と3位、四郎は4位だった。そして、2回以降は四郎は出場せず、プロ育成に力を注ぐ。安田幸吉や宮本留吉、中村寅吉らキャディ出身者をプロゴルファーとして育てていったのである。日本のゴルフがどちらかといえばアメリカン・スタイルといわれるのも、赤星兄弟の影響が大きいことは間違いない。

### 箱根を契機にコース設計家の道へ

赤星四郎が本格的なコース設計者になるのは戦後のことである。だが、戦前の1929(昭和4)年にも霞ヶ関カントリー倶楽部のコース設計の相談がもちかけられ、応じている。ただし、基本図面を書いただけで、設計料も貰っていない。その意味ではやはり、箱根カントリー倶楽部がコース設計者・赤星四郎のスタートといえる。

箱根カントリー倶楽部は1951(昭和26)年に設立が計画されたが、戦後まもなくの頃だから資本の面や芝の確保などに苦労した。ブルドーザーはクラブハウス用地を均すのに使用しただけで、工事の大半は小田原や仙石原で人を雇い、人力で土を削って芝を植えた。ようやく完成したのは1954(昭和29)年のこと。当時の日本ゴルフ協会副会長の野村駿吉がコース設計者として

赤星四郎を紹介した。四郎は現在の箱根観光ホテルから予定地を俯瞰してひと目で地形を気に入り、当時のケモノ道を通って半日がかりで現地視察をした。そして、実際の設計では箱根外輪山をコースレイアウトに取り入れ、稜線のうねりをフェアウェイやバンカー、ラフのマウンドに活かすこととした。さらに、日本人の体格がやがて向上することを念頭に置いて、ロングショットに重点を置いたことも特徴になっている。

ちなみに「箱根カントリー倶楽部」の命名も四郎によるものである。創設メンバーたちが「奥箱根カントリー倶楽部でどうか」と言ったのに対して、「そんな遠慮をする必要はない」と明快に断を下したのである。その後も、四郎と箱根との関わりは深く、シニア時代の約10年間、ひと夏を仙石原の岩崎家で過ごしていた。岩崎家では、180cmの巨躯だった四郎専用の浴衣があったという。

この箱根カントリー倶楽部でコース設計家としての赤星四郎の名声は上がる。そして、富士や桜ヶ丘、芥屋、伊豆韭山などの名コースの設計を次々と手がけていくようになる。彼が亡くなったのは1971(昭和46)年、76歳であった。

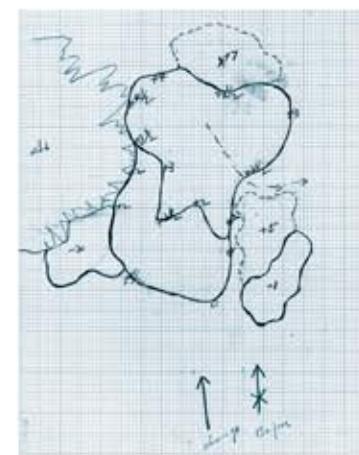
※参考文献:『箱根カントリー倶楽部三十年史』(箱根カントリー倶楽部刊)、  
『日本ゴルフ協会七十年史』(日本ゴルフ協会刊)、  
『ゴルフ翔ぶが如く』(早瀬利之著、廣済堂出版)、  
『壺中の天地』(岩崎俊男著)



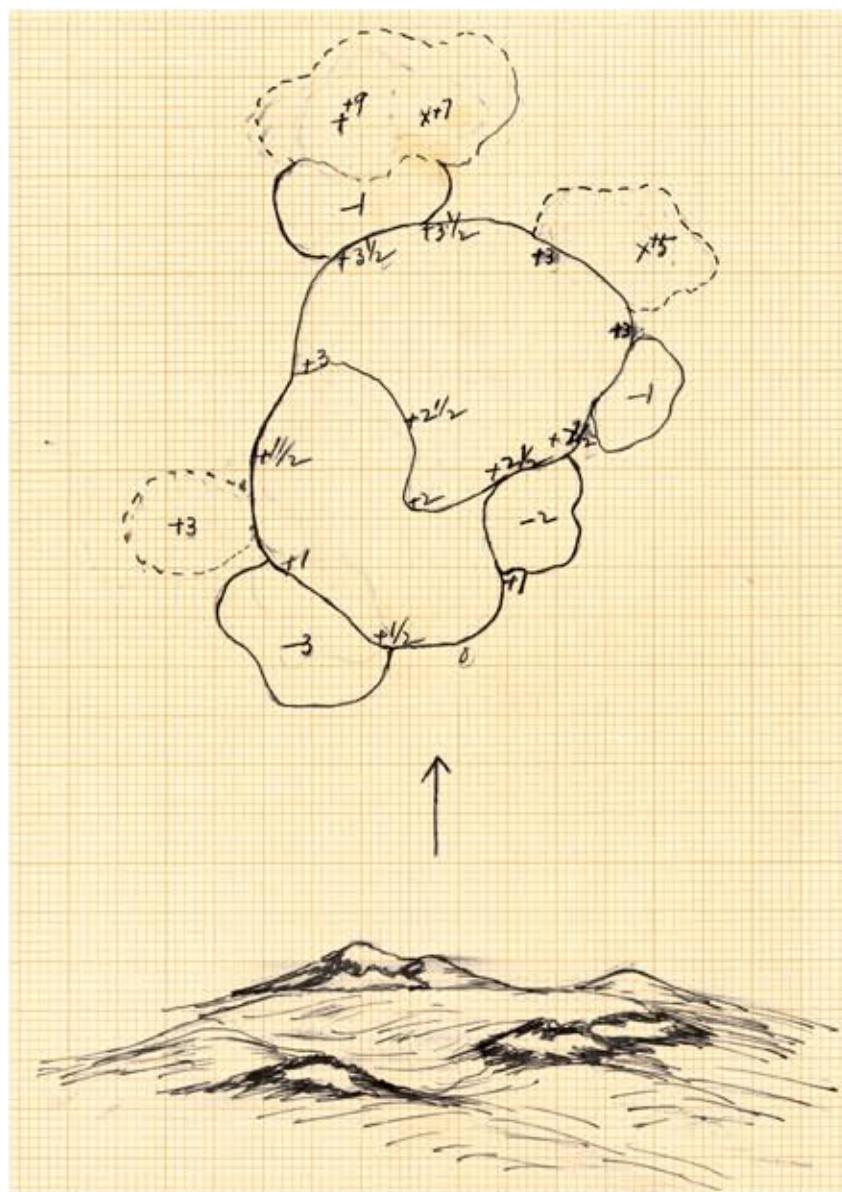
赤星四郎



赤星四郎の豪快なスイング



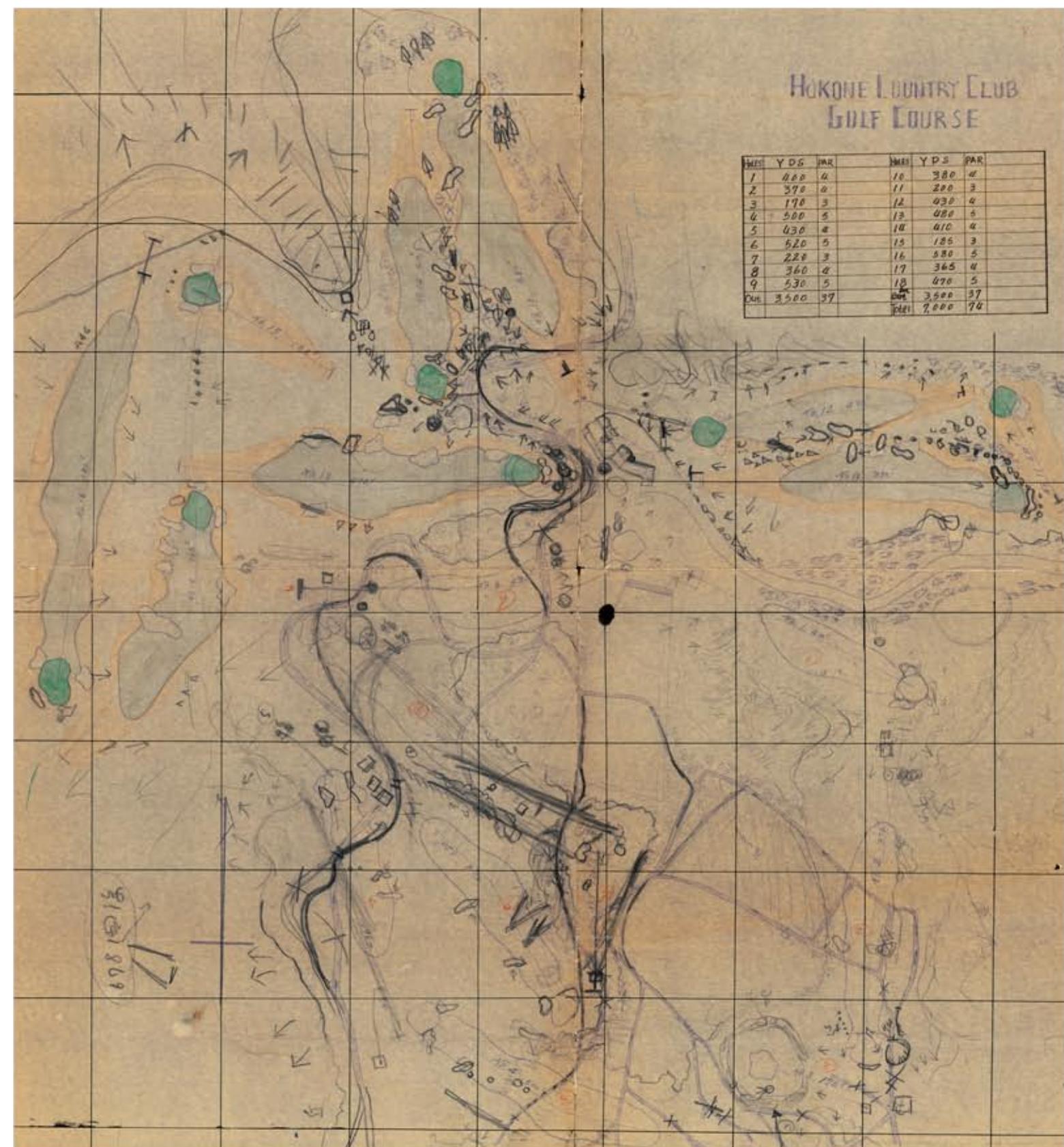
数字は中央を0としてその高低差を表している。円形ではなく四角形の角や隅をカットしてグリーンを設計していた



1番ホール(旧2番ホール)のグリーン設計図

この図面はこの50周年記念写真集編集のため、古い写真などを複写していた時に運よく見つけられたものである。

それまで9ホール分の青焼図面だけはあったが、残る9ホール分とオリジナル図面は存在しないと長年いわれていた。しかし、この発見で18ホール分全ての原図と全体の構想図が当俱楽部の資料の一つに加えられた。



自然のままのアングュレーションを大事にして、人工的なコース造りを嫌った赤星四郎が全体の流れを作るようティやバンカーの位置を何度も決め直した様子がうかがえる。



1934(昭和9)年秋の耕牧舍跡地全景。撮影者は不明だが、戦前の仙石原の姿を伝える貴重な写真(箱根温泉供給株式会社蔵)



上の写真をもとにしたスケッチ。中央やや右のイタリ池、苗甫、耕牧舍廃舍跡のあたりが箱根カントリー倶楽部になった(箱根温泉供給株式会社蔵)

# 箱根カントリー倶楽部50年のあゆみ

年 月	俱 楽 部 ・ 会 社 関 係 事 項	ゴルフ 及 び 一 般 社 会 関 係 事 項	年 月	俱 楽 部 ・ 会 社 関 係 事 項	ゴルフ 及 び 一 般 社 会 関 係 事 項
昭和28年 4月 5月 6月	株箱根カントリー倶楽部の前身、奥箱根興業㈱創立 発起人会並びに創立総会開催、箱根カントリー倶楽部発足、理事長に渋沢秀雄氏就任 工事着工、会員募集開始		平成3年 1月 4月 5月 6月	開場35周年記念行事開催 スタート時間間隔を7分に変更(従前6分) コース管理棟、男子独身寮完成	雲仙普賢岳噴火 湾岸戦争勃発
昭和29年 4月 7月 8月 12月	イン9ホールの工事を完了、仮開場	関東倶楽部対抗競技会復活(相模CC)	平成4年 4月 5月 6月	経営管理を倶楽部より会社へ移管 平成5年 4月 4月 6月	長崎県雲仙普賢岳大火碎流発生
昭和30年 7月 昭和32年 1月 4月 10月	株箱根カントリー倶楽部創立され奥箱根興業㈱を吸収合併、社長に渋沢秀雄氏就任 第2代理事長に大神一氏就任 18ホール完成正式開場	JGA会長石井光次郎氏就任 第5回カナダカップ、霞ヶ関C.Cで開催され日本(中村寅吉、小野光一)団体優勝、中村寅吉個人優勝、ゴルフ人気高まる	平成6年 4月 4月 7月	自動散水設備完成 9番、18番ホール元に戻す	皇太子殿下と小和田雅子様ご成婚 北海道南西沖地震(M7.8) 関西空港開港
昭和34年 7月 昭和35年 7月 9月	関東倶楽部対抗競技に初出場 開場5周年記念行事開催	カラーテレビ本放送開始	平成7年 1月 3月 4月	クラブハウス増改修完成(新ロッカー室完成) 開場40周年記念行事開催	阪神淡路大震災(M7.2) 地下鉄サリン事件発生 史上最高の円高 79.75円
昭和36年 5月 昭和37年 4月 10月	株箱根カントリー倶楽部社長に大神一氏就任 会報「箱根」発刊	アジア・サーフィット始まる JGAがHDCPを一律「3」引き下げを通達	平成8年 6月 12月	練習場ハウス完成・練習場改修アプローチ練習場完成 17番ホールイタリ橋改修完工	消費税5%
昭和38年 11月 11月	新クラブハウス完成	乙女道路開通 東海道新幹線開通・東京オリンピック開催	平成9年 4月 7月 11月 12月	練習場ハウス完成・練習場改修アプローチ練習場完成 12番ホールグリーン後方～13番ホールティグランド右側管理道路移設完工	北海道拓殖銀行破綻・山一證券破綻
昭和39年 9月 10月	クラップハウス移転に伴いホール番号を移動		平成10年 2月 3月 4月	17番ホールグリーン右側管理道路移設完工	第18回冬季オリンピック長野大会開催
昭和40年 5月 5月 7月	株箱根カントリー倶楽部社長に安西浩氏就任 第3代理事長に永野重雄氏就任 開場10周年記念行事開催	郵便番号制度発足 東名高速道路開通・小田原厚木道路開通 日本万国博覧会開催(3/14～9/13)	平成11年 3月 5月 5月	8番ホール橋完成 4番・14番コース売店建替 関東倶楽部対抗神奈川地区予選競技開催	JGA会長後藤田正晴氏就任
昭和41年 10月 昭和43年 7月	日米シニア選手権競技開催 新ロッジ完成		平成12年 1月 2月 5月 8月 10月 10月	開場45周年記念行事開催 KGAアンダーハンディキャップゴルフ競技開催 神奈川オープンゴルフ選手権開催	JGA第1回男女日本マスターズゴルフ選手権競技の実施を決定 北海道有珠山噴火
昭和44年 5月 昭和45年 7月 10月	開場15周年記念行事開催 日米シニア選手権競技開催	日本女子オープン選手権創始(大利根CC) JGA会長安西浩氏就任 沖縄返還協定調印	平成13年 3月 12番ホール長尾橋改修完工 3月 6月 9月	12番ホール長尾橋改修完工 第6代理事長に平田秋夫氏就任	三宅島噴火、全島住民避難で離島
昭和46年 1月 4月 6月 10月	開場20周年記念行事開催	札幌で冬季オリンピック開催 西湘バイパス全面開通 石油ショック	平成14年 4月 4月 4月 6月 10月 10月	日本女子オープンゴルフ選手権開催 神奈川オープンゴルフ選手権開催	日本ゴルフ100年祭 丸山茂樹米ツアー(ミルウォーキーオープン)初優勝
昭和47年 2月 9月	関東クランドシニア選手権競技開催	橋口久子オーストラリアオープン優勝	平成15年 3月 4月 4月 5月 10月 10月	日本女子オープンゴルフ選手権競技開催 神奈川オープンゴルフ選手権競技開催 日本スポーツマスターズ開催	米国で同時多発テロ發生
昭和48年 10月 昭和49年 4月			平成16年 1月 2月 4月 5月 8月 10月 11月	神奈川県アマチュアゴルフ選手権競技準決勝開催 日本シニアゴルフ選手権競技開催 日本スポーツマスターズ開催	悪質な違反の罰則を強化改正道路交通法施行
昭和50年 6月 7月 10月	新浴室完成 開場20周年記念行事開催	距離の呼称をヤードからメートルに変更 JGA会長山形 章氏就任 橋口久子全米女子プロ優勝 日本ゴルフ協会 公式競技の使用球をラージに統一	平成17年 1月 2月 4月 5月 6月 7月 10月	神奈川県アマチュアゴルフ選手権競技準決勝開催 JGA公認女子暫定コースレーティング認定 国民体育大会奥東ブロック大会ゴルフ競技開催 神奈川オープンゴルフ選手権競技開催	世界ゴルフ選手権日本(丸山茂樹、井沢利光)優勝 イラク戦争・米英軍イラク進攻 ゴルフ場利用税の一部輕減年少者70歳以上高齢者非課税
昭和51年 4月	関東シニア選手権競技開催	成田空港開港	1月 1月 4月 4月 5月 5月 6月 6月 7月 8月 9月 10月	10番コース売店建替、ティグランド改修 大型治水工事完工(9ヶ所)	JGA会長安西孝之氏就任 日本女子プロゴルフ協会橋口久子会長が世界ゴルフ殿堂入り
昭和52年 4月 6月 10月	9番、18番ホール入替え	KGA6月例競技開催	4月 5月 5月 6月 10月 10月 11月	4月 5月 6月 10月 10月 11月	
昭和53年 4月 5月 6月 9月 10月	関東女子選手権競技開催	日本ゴルフ協会ハンディキャップ規定制定 青木功世界マッチプレー優勝	4月 4月 4月 5月 8月 8月 10月 10月 11月	神奈川県アマチュアゴルフ選手権競技準決勝開催 KGA J-sys 加盟 神奈川オープンゴルフ選手権競技開催 日本シニアゴルフ選手権競技開催	神奈川県アマチュアゴルフ選手権競技準決勝開催 日本シニアゴルフ選手権競技開催 日本スポーツマスターズ開催
昭和54年 1月 7月	JGAHDCPに完全移行 開場25周年記念行事開催	岡本綾子米ツアー(アリゾナコバーラッシュ)初優勝 青木功ハワイアンオープン優勝 三宅島雄岳21年ぶり大噴火	1月 1月 2月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	1番コース売店建替、ティグランド改修 大型治水工事完工(9ヶ所)	青木功プロ世界ゴルフ殿堂入り
昭和55年 6月	関東倶楽部対抗神奈川地区予選開催	JGAが距離表示にメートル、ヤードの併記を勧奨 JGA会長細川謙貞氏就任	4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	4月 5月 6月 10月 10月 11月 1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	新潟中越地震(M6.8)川口町震度7を記録
昭和56年 6月		伊豆大島三原山209年ぶり大噴火	5月 5月 6月 6月 7月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	JGAHDCP規定改正、JGAHDCP小数点第1位表示に改正
昭和57年 6月		国鉄分割民营化	5月 5月 6月 6月 7月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	第1回ワールドカップ女子ゴルフ日本(宮里藍、北田瑠衣)優勝
昭和58年 2月 10月		岡本綾子賞金女王(米ツアーシリーズ4勝)	5月 5月 6月 6月 7月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	岡本綾子プロ世界ゴルフ殿堂入り
昭和59年 5月	第4代理事長に安西浩氏就任	昭和天皇崩御	5月 5月 6月 6月 7月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	
昭和60年 1月 4月 7月	開場30周年記念行事開催・開場30周年記念誌発行	消費税導入3%・ゴルフ利用税導入(娯楽施設利用税)	5月 5月 6月 6月 7月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	
昭和61年 9月 11月	関東シニア選手権決勝競技開催	東証日経平均38,915.87円の最高値、以後バブル経済崩壊平成不況へ	5月 5月 6月 6月 7月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	
昭和62年 4月 12月	距離の呼称をメートルよりヤードに変更	スモールボール使用禁止(ラージボールに統一)	5月 5月 6月 6月 7月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	
昭和64年 1月			5月 5月 6月 6月 7月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	
平成元年 4月 12月			5月 5月 6月 6月 7月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	
平成2年 1月 4月 4月	株箱根カントリー倶楽部社長に小山五郎氏就任 第5代理事長に小山五郎氏就任		5月 5月 6月 6月 7月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月	

THE EARLY DAYS OF  
HAKONE COUNTRY  
CLUB



中央にクラブハウスが見え、左手前は4番グリーン。右手前から早川がクラブハウスに向かって流れている



旧クラブハウス。小高い場所に位置し、芦ノ湖からの強風をストレートに受けるため、翼を広げるようなスタイルで建築された。  
山小屋風の趣のある建物だったが、開業して7、8年で老朽化し、建て替えを余儀なくされた。



開業当時の11番ホール。少年キャディをマンツーマンで連れてプレイしていた様子がうかがえる



開業当時の16番ティグラウンド。まだ木がまばらで、クラブハウスまでストレートに見渡せた。まさに「草原のリンクス」のイメージである

## 箱根の自然と歴史

### 大自然に包まれた箱根

関東と東海にまたがって広がる富士・箱根・伊豆国立公園。秀麗かつ玄妙な山渓、複雑な海岸線、紺碧の海原、こんこんと湧き出する温泉…。日本を象徴するその景観美は、古くから人びとに愛され、親しまれてきた。なかでも東端に位置する箱根は、湯治場であり、かつ東西交通の要衝でもあった。

箱根連山の形成は40万年前に遡る。噴火によって溶岩が噴出し、さらに陥没して巨大なカルデラが生まれるという火山活動が幾たびか繰り返された。20万年前の箱根の山は、富士山のような美しいフォルムをしていたという。そして3000年前、神山が水蒸気爆発を起こし、その土石流で湖尻が堰き止められて芦ノ湖が誕生した。大涌谷はその当時の惨状をいまに伝える火口跡であり、荒々しい地球の息吹そのものともいえる。

### ツワモノどもの夢の跡…

箱根の地はまた、歴史の目撃者でもあった。仙石原の北に金時山が聳え、麓に公時神社が鎮座するが、金太郎こと坂田公時は実在した侍である。平安中期に活躍した武将、源頼光の家来だった。時代は下り、武家政権の開祖となった源頼朝は関東の武士団を率いて伊豆で決起し、やがて鎌倉に幕府を築く。

戦乱に明け暮れた室町時代、北条早雲は箱根の峠を越えて東に攻め入り、関東を席巻する。戦国時代の幕開けである。そして、二代・氏綱、三代・氏康と成長を続けて関東一の戦国大名となり、北条氏は北の上杉謙信、西の武田信玄らと霸権を競つた。

その北条を攻め滅ぼした豊臣秀吉も、やはり箱根を越えて攻め下り、小田原城を囲んだのである。

江戸幕府を開いた徳川家康も箱根を重視した。物資や人の往来の便をよくするために街道の整備に力を注ぎ、とりわけ京・大坂に通じる東海道に最も力を注いだが、箱根に関所を置いて警戒することも怠らなかった。「入り鉄砲に出女」と称されるように、武器の流入と人質である大名の妻の脱出をここで阻止し、「太平の世」を謳歌したのである。

そうした武将たちにゆかりの史跡や古戦場が、箱根の各所に点在している。

### 日本を代表するリゾート地へ

明治へと世が代わって東京が首都になると、箱根は近代的なリゾート地として脚光を浴びるようになる。近代以前にも箱根

神社の参拝客や箱根七湯の湯治客で賑わっていたが、欧米人や政府要人たちの避暑地として注目を集めはじめる。

その象徴ともいえるのが、1878（明治11）年に創業した富士屋ホテル。和洋折衷の、今風にいえばレトロな建物は、西洋文化を吸收しつつ日本の伝統文化もアピールしようとした明治人の心意気を感じさせる。思えば、チャップリンもヘレン・ケラーもジョン・レノンも、ここを訪れているのだ。ホテルを開業するにあたっては、塔之沢から宮ノ下までの山道を開削して人力車が通れるようにし、1891（明治24）年には自家用発電装置を設置して電灯を灯すなど、近代化の努力は嘗々と続けられた。

箱根は東海道筋にあっただけに、交通の発達も早かった。1919（大正8）年には強羅までの箱根登山鉄道が通り、1921（大正10）年には日本で二番目のケーブルカーが開通している。戦後になるとさらに交通網の発達が著しく、なかでも1950～60年代には小田急と西武が開発競争を繰り広げて箱根の観光化に拍車をかけ、日本でも最大のリゾート地となったのである。

60年代以降はさらにモータリゼーションの時代へと突入する。箱根カントリー倶楽部にとっては、御殿場から長尾峠を越える山道が難所だったが、1964（昭和39）年に乙女トンネルが開通してからは遙かに交通至便となった。そして、1969（昭和44）年に東名高速が、1979（昭和54）年には小田原厚木道路が開通

して以来、首都圏からの道路事情はさらに快適なものとなった。箱根の東からも西からも快適なルートが通ずるようになったのである。

### 仙石原と箱根カントリー倶楽部

仙石原は箱根火山のカルデラ湖だったが、長い時間をかけて湖から湿原へ、湿原から草原へと変貌を遂げた。標高1000mの外輪山にぐるりと囲まれた直径8km、標高700mのすり鉢状の盆地、それが現在の仙石原である。

その仙石原の開発は、金融・事業王としても知られた渋沢栄一らが、明治時代に牧畜・植林・温泉別荘地として着手したことにはじまるが、本格的な開発事業は昭和以降である。そのため湿原の乾燥化が早まったので、10万m<sup>3</sup>を特別保護区として立ち入り禁止とし、とくにそのうちの9000m<sup>3</sup>は天然記念物に指定されて大切に保護されている。一般に公開されている箱根湿生花園は、その北端の一部である。高原リゾートとして開発が進む仙石原だが、このように自然との共生が意識的に図られており、湿原や草原には野鳥や野生の草花が数多く生息し、箱根らしさを最もよく残したエリアといわれている。

その西端に、箱根連山と仙石原の地形をそのまま活かすかたちで箱根カントリー倶楽部は位置している。



水を滴々とたえた芦ノ湖。夏はとくにリゾート客で賑わう



天然記念物に指定されている箱根仙石原温原植物群落の石碑



ススキの銀穂も美しい仙石原



噴煙をあげる大涌谷



大涌谷遠望



長尾峠から望む富士山の夕景

## 壺中の天地

箱根カントリー倶楽部は、ここを訪れるたびに「壺中の天地」、あるいは「別に一壺の天」という言葉を思いおこせます。これらの言葉は、茶室の掛物などでたまに見かけますので、ご承知の方も多いでしょうが、ざっとご紹介しますと、こんな話です。

後漢の時代（西暦25～220年）汝南という町の中に薬を売る老翁があり、人々から壺公とよばれていました。いつも店さきに壺をひとつぶらさげていたからです。薬が良くきき、しかも人柄が良かったので、壺公はみんなに尊敬されていましたが、不思議なことに夕方店じまいをすると、壺の中にヒラリと飛び込むというクセを持っていました。たったひとり、この秘密に気付いていたのが、町の役人で、いつも望楼に登って見張りをしている費長房という人でした。費長房はなにかと口実を設けて壺公に近づき、とうとう壺の中に一緒につれていってもらうことに成功しました。驚いたことには、壺の中は広大な別天地で、金殿玉楼がそびえ立ち、広い庭園には珍しい草木がいっぱいにはえており、きれいな花が咲き、奇岩泉水の配置も目を見張るばかりの見事なものでした。それから美酒佳肴のもてなしを受け、夜のふけるまで壺公と歓談しましたが、実は壺公は仙人で、しばらく人間界に身をやつしていたという事情がわかりました。帰りぎわに壺公は、壺の中のことは決して他言するなよ、と念を押したそうです。

箱根カントリー倶楽部は四方を麗しい山なみに囲まれ、芦ノ湖よりもさらに低い壺の中の別天地です。この神秘的な土地では、みんなが俗世の瑣事を忘れ去り、仙境の別時間を楽しむことができます。

さあ、今日もかわせみの影を慕って、壺中の天地に一步を踏み出しましょう。

近藤道生

## POSTSCRIPT

## Paradise in a Stoneware Bottle

Each time I visit the Hakone Country Club, I am reminded of the phrases Kochu no tenchi (=paradise in a stoneware bottle) and Betsu ni kore ikko no ten (=this other world in a stoneware bottle). These phrases are sometimes seen written on decorative scrolls hung in teahouses and thus, already familiar to many of you. But allow me to take a moment to relate the ancient Chinese story behind them.

In the Later Han Dynasty (25-220AD), in a town called Chi Nan, there lived an old man who sold medicine. He was known to the old and the young in town as Hu Gong or "Stoneware Bottle Man," because he always kept a stoneware bottle hanging in his storefront. Hu Gong's medicine worked well and, as a man of good character, he earned the respect of the townsfolk.

What the town did not know about Hu Gong was his strange habit of jumping into the stoneware bottle at the end of the day when he closed his shop. Only one person was aware of this secret; Fei Chang Fang, the town official who was always atop the watchtower keeping watch over the town. On different occasions, Fei Chang Fang approached Hu Gong and eventually succeeded in convincing Hu Gong to take him inside the stoneware bottle.

Much to his surprise, Fei Chang Fang discovered a whole new world inside the bottle: stately mansions towering above; boundless gardens filled with rare and wondrous plants; and beautiful flowers blooming in abundance. Strangely-shaped rocks and fountains were placed with such grace as to make the eyes dance. Fei Chang Fang was treated to a sumptuous banquet, and confabulated with Hu Gong late into the night. Hu Gong was in truth a hermit wizard temporarily living in disguise in the world of human beings. When it was time for Fei Chang Fang to leave, Hu Gong warned him emphatically not to tell a soul of what he had witnessed inside the stoneware bottle.

The Hakone Country Club, surrounded as it is by graceful hills, is a paradise in a bottle situated lower in altitude than Lake Ashinoko. In this land so steeped in mystery, we can all leave the cares of the world behind us and enter a new dimension.

So, let us again don our kingfisher's shadow and step into our "paradise in a bottle" today.

Michitaka Kondo

## 壺中の天地 箱根カントリー倶楽部50周年記念写真集

2005年7月15日発行

発 行 箱根カントリー倶楽部

〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原1245

TEL 0460-4-8571 FAX 0460-4-7266

編 集 箱根カントリー倶楽部

題 字 近藤道生

撮 影 秋山真邦

デザイン 吉田猛雄

製 作 株式会社エムシーアール TEL 075-451-1987

印 刷 株式会社一九堂印刷所 TEL 03-3542-0191

ISBN4-9902471-0-8

## 壺中の天地 THE 50TH ANNIVERSARY ALBUM

KOCHU NO TENCHI OF HAKONE COUNTRY CLUB

PUBLISHED JULY.15.2005

PUBLISHER HAKONE COUNTRY CLUB

1245 SENGOKUBARA HAKONE TOWN

ASHIGARASHIMOGEN

KANAGAWA PRE. 250-0631 JAPAN

TEL +81-460-4-8571 FAX +81-460-4-7266

EDITOR HAKONE COUNTRY CLUB

TITLE LETTERING MICHITAKA KONDO

PHOTOGRAPHER MASAKUNI AKIYAMA

DESIGNER TAKEO YOSHIDA

PRODUCTION MCR CO.LTD TEL+81-75-451-1987

PRINTER ICHIKUDO PRINTING CO.LTD TEL+81-3-3542-0191

ISBN4-9902471-0-8